

ルターの説教を読んで

松浦 剛

「ルター著作集第二集」10巻（聖文舎 1988年、3ページ）に、ルターの説教は2000篇が残されていることが記されている。ほとんどが筆記者によって記録されたものであるという。それらの説教を読むことができるのはうれしいことである。今回、3種類の説教を取り上げて、感想なりとも記述したい。

死の準備についての説教

この表題の説教は、ルター著、石原謙・吉村善夫訳「マリヤの讃歌」（岩波文庫、1941年、155～188ページ）に含まれている。ルターが、この説教を試みたのは1519年であり、宗教改革の初期の動行があつて2年ほどの時のものである。

ルターは、若い日に3度死について深刻な経験をし、大学法学部での学びを捨てて修道院に入った動機も死であつた。ザクセンのフリードリヒ賢公のもとに顧問官マルクス・シャルトがいて、この人がルターに対して死の準備についての教えを求めた。それに対応してルターは、「死の準備についての説教」を伝えることになった。

死ほど人に平安と恐れを与えるものはない。死について学ぼうが、避けようが、死は厳然として各人に迫ってくる。このような現実に対して、ルターは福音的信仰に立って、死に臨む正しい態度とはどのようなものなのかを説く。ルターは、さりげなくマタイによる福音書11章28節を開き、イエス・キリストの招きの声を響かせる。

内面的な信仰が生きて働いていく限り、なにも心配することはなく、死や地獄の恐れはキリストの十字架と復活に基づく信仰によって克服されていく。サタンは、人間を常に試みて、人間がまことの信仰から離れるように仕掛けてくる。実際に死が具体化してくるにつれて、その時こそ信仰を固守すればよい、と説いている。

語り口が生硬であるだけに、かえってルターの信仰義認の教えがきっちりと解き明かされていて、みことばのみ、信仰のみ、の基本をズバリと示している。「ルターは、会衆を聖書の出来事の中へ連れていくという努力をするのだが、しばしばそれを、聖書の出来事を会衆の生活の中に移すというやり方でなしとげる。」と徳善義和はいつている（「礼拝と音楽」13号、日本基督教団出版局、1975年、9ページ）。確かにこの説教では死に打ち勝たれたイエス・キリストの出来事を、死の葬儀にとまどう市民の生活の現実まで届けている。

これは「ルター著作集第二集」10巻（聖文舎、1988年、徳善義和訳、13～181ページ）に収録されている。Ⅰコリント15章の講解説教は1532年8月11日から1533年4月27日まで、17回にわたってヴィッテンベルクにおいて伝えられた。日曜日の午後に講壇に立っているが、断続的に奉仕していて、毎週ではない。

この講解を読んでみて感じたことは、復活の章として親しまれているⅠコリント15章のテキストを17分割して、キリストの復活の確証をもらさず説いていて、みごとであるということである。

Ⅰコリント15章の講解から福音的香りが立つのは言うまでもないことである。キリストの復活さえ明らかにしておけば、会衆一人一人の信仰は健全堅実に保たれる、というルターの確信のようなものが伝わってくる。それと共にこの講解からもれ聞こえてくるルターと妻カテリーナ、宗教改革の同志たちの姿、時代背景と事件に、私は少なからぬ興味関心を覚える。ルターは50歳前後であったが、ルターには病気があり、体の不具合をかかえて講壇に立っていることがわかる。妻カテリーナの出産、育児、病気、家事の他忙なども伝えられる。牧師館の地下で自家製のビールがうまくできて、妻カテリーナにその労をねぎらうことばを向けている。メランヒトンの病気とかその地方で発生したききん、ペスト流行も言及されている。勿論、ルターの論敵とか迫害者の存在も浮かび上がらせていて、ルターが平和と喜びの日常にあったわけではないことがうかがえ、読み進むうちにどことなく緊迫感が出てくる。さすがはルターの説教だなと思う。

一方、Ⅰコリント15章の講解説教を聞き続けた会衆の姿も見えてくる。宗教改革が開始されて15年とか16年を経て、会衆の側では気持ちにたるみが生じている。元来会衆には聖書のことばについての素養がなかっただけに、信仰的緊張がなくなってくると、愚かな言動が生じてくる。ある人が死人を埋葬した穴をのぞいた時、ウジ虫がわき、白骨があらわになっていて、ルターが説く復活の望みに現実味がないとの思いを街角でしゃべった。その情報を伝え聞いたルターは、Ⅰコリント15章の講解説教の中で、霊的な祝福の世界に引き戻していく。

Ⅰコリント15章の講解説教の物足りなさがないわけではない。15章3～4節の部分でルターが講解する際、①全人類の罪のためにキリストが死んだこと、②墓に葬られたこと、③3日目に復活されたこと、の3点を説教の中で掘り下げることをしていない。日曜日の午後の集会がどのような名目の集まりであったかに関係するのかもしれないが、今日の信仰者からすると、物足りなさという感じがぬぐえない。

ヨハネ福音書 1～4 章連続説教

ヨハネ福音書1～4章連続説教は、1537年7月7日から1540年9月11日までに、合計53回連続の説教がされた。連続とはいうものの、毎週という意味ではなく、断

続的に 1～4 章のテキストを連綿と講解していったのである。ヴィッテンベルクの教会のブーゲンハーゲン牧師がデンマークにおいて奉仕するために不在になったので、ルターが土曜日毎の集会でヨハネ福音書 1～4 章連続説教をしたのであった。

日本語では、「ルター著作集第二集」6 巻（リトン、2010 年）に 21 篇の説教が収録されていて、「ルター著作集第二集」7 巻（リトン、2008 年）に 32 篇の説教が含まれている。翻訳者は江口再起、湯川郁子、中野隆正、立山忠浩、徳善義和、稲田実と多彩な方々が用いられている。比較的最新の出版ということもあって、難しい内容が平易で明解な日本語に翻訳されていて、すんなり理解できるのはありがたい。

ヨハネ福音書 1～4 章連続説教を読んでみて気付いたことがある。ルターは 1483 年に誕生し、1546 年に召天した。1537 年から 1540 年までのヨハネ福音書 1～4 章の連続説教は、ルター晩年の講解説教となったということである。最もルター自身は、課題山積の中で奉仕を貫いたので、ヨハネ福音書からの 53 回の説教が晩年の説教になるとは思っていないようで、ひたすら前進する中でのみことばの奉仕でしかなかった。

徳善義和によると、ルターも含めた宗教改革時代の説教の神学的特徴は、説教は①神の**ことばの生きた**、**ダイナミックなありよう**のひとつであり、②**神のことばを通して神の啓示と人間の実態を「あらわにする」機能**が果たされるものであり、③**礼拝**の中において神の奉仕が**みことばを通して進められること**といわれている（「礼拝と音楽」13号、日本基督教団出版局、7～8 ページ）。

そのようであるなら、ルターの円熟期の説教であると思われる、ヨハネ福音書 1～4 章連続説教 53 篇から、ルターがどの程度の使信を伝え切ったのかを味わえればよい。

第 1 に、ルターはなぜヨハネ福音書 1～4 章から連続の講解説教をしなければならなかったのか、と考えさせられた。1 章においてヨハネのキリスト証言とキリスト告白がまことに周到に説かれている。み子キリストが受肉して人となったこと、キリストは神であることを講解する。ヴィッテンベルクの会衆にこのことをどうしても伝える重荷があったのであろう。そのためには、ヨハネ福音書 1 章からでなければならなかったはずである。

第 2 に、初代教会時代のキリスト告白をリアルに再現しなかったのではないか。ルターの時代に人間の理性によってイエス・キリストの生涯とメッセージを解明しようとする動きがあったらうし、異端的な主張も勢力を増してもいた。

第 3 に、ルターの説教を聞く会衆の中には、みことばに堅く立つ信仰から離れて、福音の光の中に留まらない人々もいた。そのような会衆に神中心の信仰生活を送るようにと訴えるには、ヨハネ福音書 1～4 章からのメッセージが必要であったはずである。

ところで、ルターはヨハネ福音書 1 章 1 節から講解説教をスタートさせ、4 章 15 節あたりまで講解説教をした時に、一連の説教奉仕をいさぎよく止めた。その理由は、ブーゲンハーゲン牧師がデンマークから帰国したからである。留守の講壇を守って来たルターはその責任をはたしてきたが、あっさりと連続説教を打ち切ってしまった。その態度は美

しいように思えてならない。人間的なこだわりや執着もあったかもしれないが、すべて神とブーゲンハーゲン牧師にまかせている。もし、それ以上ルターがヨハネ福音書連続説教を8章とか12章まで続けていたならば、私は「ルター著作集第二集」の中の「ヨハネ福音書連続説教」を全部で9巻も10巻も購読しなければならなかっただろう。私は若い日から今日まで一貫して「ルター著作集」を買い続けている。私の財布にお金がさほど入っていない理由の一つが、ルターの本を買うところにあるからである。

ルターは課題山積の中、郷里アイスレーベンを訪ねた時、病気が発作的に出て、64歳で召天した。もしかしたら私も、書棚にルターの本をたくさん並べておりながら、全部読み終わらない前に、ポックリ死んでしまうかもしれない。そうだとすると、出版元の(有)リトンと販売店CLC名古屋店を喜ばせたことだけでもよかったということになる。

締めくくりとして、私の愛知国際病院聖書集会における説教奉仕のことを記述したい。この集会は火曜日の夜にあるが、私は年間11回の奉仕に通っている。説教テキストをあちこちの個所から選ぶのも大変なので、ヨハネ福音書から連続講解説教をしてきた。テキストの区切り方は、「アレティア」(日本基督教団出版局)に載ったヨハネ福音書講解のときの区切りに従っている。「アレティア」のレギュラー執筆者の中に徳善義和牧師がおられて、その書かれる文書にはルターの著作からの引用も多い。ルターがヨハネ福音書をどう読み、どのように説教したかを知ることは大変参考になる。私の愛知国際病院での奉仕は、ヨハネ福音書15章まできている。21章まで続くのかどうかは不明であるが。

(日本イエス・キリスト教団 名古屋教会牧師)

